

令和七年度山梨県高等学校芸術文化祭演劇部門県大会参加作品

山梨県立甲府昭和高等学校

はやおとうじ作

風の送り

登場人物

男	女	女	女
・	1	2	3
・	・	・	・
・	・	・	・
・	・	・	・
おじいちゃん、悟、サトリ	明日香	庄屋の娘、あすか	女性刑事、久恵、桜子

1

外は暴風雨。部屋の中は薄暗い。臨時ニュースが流れる。

声

台風情報をお伝えします。大型で並の勢力を保った台風十九号は、現在紀伊半島沖を時速八十キロで東北東に進んでいます。中心の気圧は、九七五ヘクトパスカル、中心部の最大風速は三五メートル。半径一〇〇キロ以内の風速は二五メートルを越えています。一五日の未明には東海地方に上陸する見通しで・

停電。

男が、懐中電灯で自分の顔を不気味に照らしながら登場。

男

・ ・ ・ ・ ・

女1

・ ・ ・ ・ ・

男

怖いだろう？

女1

・ ・ ・ ・ ・

男

・ ・ ・ 怖くない？

女1

・ ・ ・ ・ ・ 馬鹿みたい

男

馬鹿みたいか。そうだ、馬鹿みたいだろう

女1

・ ・ ・ ・ ・

男

いやいや、そうか、そうか

女1

・ ・ ・ ・ ・

男

停電だ。珍しいな。最近、停電なんてめったにないからな。
明日香、こっちに来い
停電の時は、家族がみなちゃぶ台の回りに集まって、蝋燭で照らされるという
のが、正しい過ごし方だ

女1

・ ・ ・ ・ ・

男

ほら。蝋燭

女1

・ ・ ・ ・ ・

男

このまま、停電がずっと続くといいな。・ ・ ・ そう思わんか

風雨の音。

大きな物音がして、女、びくつとする。

男

びつくりしたな。明日香。こっちへおいで

明日香行かない。

男

まあ・ ・ いいわ。どれ、蝋燭に火を付けてみるか

男 蠟燭に火を付ける。

男 ・・懐かしいな、この感じ・・・
明日香、おじいちゃんが子供の頃はな、停電になるとこうして蠟燭を立てて、家族がみんな集まったんだ。そしてな、誰ともなくみないろいろ話をする
女1 そうだ、わしが小さかった時に、わしのおじいちゃんがな、子供たちにこわい話をしてくれたんだ・・・聞きたいだろう

女1 ・・・・・
男 まあ、無理にとは言わないが、こっちへ来ないか。わしが、その頃聞いた話を思い出しながら、明日香に聞かせてあげよう
男 おお、その前に

男 男は懐中電灯でまた不気味に顔を照らしながらどこかへ行く。
一人になった女はおそろおそろ蠟燭の火に近づき、眺めだす。
男 そこへ、男、怖い顔をして

男 ばーーあ
女、かなり驚く。元の場所へ。

男 どーだ、驚いただろう

女1 ・・・・・馬鹿みたい

男 そーだろう、馬鹿みたいだろう
いやー、それでも、今日は明日香の声を二回も聞いた。いい日だ
台風だけいい日だな！ 台風万歳

男 は一升瓶の栓を抜いて、グラスにつぎはじめる。

男 いやいや、これから話をするからな、喉が乾くだろう

男 そういいながら、うまそうに一息に飲む。

女1 ・・・・・

男 明日香、お前、サトリの話を知ってるか

女1 ・・・・・

男 知らんのだろう

女1 ・・・・・

男 その顔は知らないな

女1 ・・・・・

男 いかんな

女1 知らないよ。知らないダメなの

間髪入れずに

男 明日香、こっちへ来い。蠟燭の回りは温かいぞ

・・・・・
サトリというのとは、妖怪だ。山にすんどつて、旅人なんかを通り掛かると脅かすんだ。でも、そんなに悪い奴じゃない。脅かすだけだ。人が驚くのを見て喜ぶんだ

女は動かない。

男 それでな、どうやって驚かすかというところ・・・
男 どうやると思う

女はぶいと顔をそむける。

男 サトリはな、人の心の中を読んでしまふんだ
だからサトリ。旅人の思っていることを全部読んで、それを言うんだ。言われた方はびっくりするだろう。で、驚いて、ギャーッつと逃げていく
それをみてサトリは面白がっていた。だから、そんなに悪い奴じゃないんだ。おつ、そうだそう

男はまた出ていく。

女は、また少し蠟燭の方へ近づく。火を見つめている。
男、鉢巻きに懐中電灯を二本さして登場。

男 がーっ

女、少しあらずさる。男、こわい声で

男 明日香ーっ、お前はコレを飲めーっ

とジュースのペットボトルを出す。

男 話すと喉が乾くん

明日香、ペットボトルとグラスを受け取る。

男 どこまで話したかな・・・サトリの話だったな。そうそう、
ある時、サトリは恋をしてしまったのだ。恋だ。恋。ドキドキするだろう？

女1
・・・・・

男 その相手というのは、村里の庄屋の一人娘なんだ。大変な器量よしで、器量良しってわかるか。美人だったんだ。まあ、庄屋の娘なんで、綺麗な着物も着せてもらってたんだな
サトリは何か娘の気をひいて、付き合いたい思っていた。それで、庄屋の家まで下りて行って、娘の様子を密かに眺めていた
その娘は数えで二十にもなるといふのに、まだ嫁にもいらない。あんな器量よしがない、と村人は思っていたくらいだ。ただ変わったところがあって、時々ぞつとするような艶かしい目で、遠くを眺めていることがあった
サトリはいつい、夢中になって、庭の中にまで入って、娘のことを見ようとした。そしたら！
どうなったと思う

女も段々気になってい様子なのだが、問い掛けられてまた横を向く。

男 サトリは娘に見つかってしまったんだ。サトリはしまったと思った。すぐに追いかかると思った。ところがだ、娘はサトリを追い払いはしなかった

お前は何者か、と聞いたんだ
突然、蠟燭が消える。

2

照明が変わる。

女2 お前は何者か

男、身をこわばらせて答えない

女2 それでも隠れているつもりなの
わが眼（まなこ）は千里先をも見通すものを
・・・もう一度聞く、お前は何者か

男 ・・・わしや、サトリじゃ

女2 サトリ？

男 そうじゃ、山に住む妖怪じゃ

女2 妖怪？

女はさもおかしいというふうに笑う。

男 なにがおかしい

女2 随分と弱々しい妖怪もいたもんだね

男 うるさい

女2 して、その妖怪がなんの御用？

男 用？用などない

女2 用もなく、わが屋敷に踏み込んだか。覚悟はできているのかい
男 ま、待ってくれ

女にやりと笑いながら

女2 では、なぜ庭にいた

男 それは

サトリは赤くなって俯く。

女2 ホホホホ、なにを赤くなっているの

男 ・・・

女2 妖怪とやら、一体、どんなことができる

男 ……人の心が読める

女、少しひるんで…

女2 ほう、ならば私の心を読んでみよ

男 たやすいこと

しかし、サトリには女の心が読めない。

女2 ……どうした、口先だけか

男 ……違う

女2 ではどうして私の心を読まぬ

男 それは…

女2 つまらいね…せっかく面白いことでも起こるかと思えば、とんだ見かけ倒しだねえ。妖怪というものの怪しいもんだ

男 うそじゃねえ。うそじゃねえんだ

女2 じゃあ、この私の心のうちを覗いてご覧よ。え、どうしたんだい

男 サトリは惚れた女の心は読めないことになってるんだ

女一瞬、あつけにとられる。そして笑い出す。

女2 ホホホホホホホ、おかしいこと。お前、私を好いているのか。

男 ……ああ

女2 ホホホホホホホホ

男 笑うな

女2 ……良かったじゃないか。妖怪。お前命拾いをしたんだよ。ホホホホ…。

男 命拾い

女2 世の中にはね、知らない方が幸せなことがたくさんある。惚れた女の心根が身の毛もよだつおぞましいものじゃあね…。

男は様子が飲み込めないでいる。

女は落胆とも安堵ともつかない表情をしていたが、急に

女2 お前、本当に私を好いているのかい

男 ……ああ

女2 本当なんだね

男 頷く

女2 では、一つお前に頼みがある

男 頼み？

女2 そうだ。明日の明け方までに私の言ったものを捕まえて、ここに持ってくるのじゃ、いいか

男 もつてくればいいのか。もつてくれば、わしのことを好いてくれるのか

女2 そうだ。ただし、明日の明け方までにだ。できるかい。ちよつとでも遅れたら、お前はもう私を見ることもできなくなる。大丈夫かい

男 ああ。して、何を持ってこいと

女2 女郎蜘蛛を百匹

男 女郎蜘蛛？そんなもの、百匹もどうする

女2 お前は余計なことを考えなくて良いんだよ。持ってこれるか。来れないのか

男 …… 明日の明け方までだ

ふつと灯が変わる。

3

照明が変わる。

男

それだな、サトリは次の朝までに女郎蜘蛛を百匹捕まえて、籠にいれて持っていった。百匹もいるから争って、共食いなどしている
それでも娘は、嬉しそうにそれをみつめて座敷の中に入ってしまった
次の日サトリが庭へ行くと娘がこういうのだ

「明日の朝までにmamshiを百匹捕まえてきておくれ」
mamshiがどうしてそんなに必要なのか、サトリには分からなかったが、それを持っていけば好かれるのだと思うと、一生懸命山の中でmamshiを捕まえた
そんな日々が何日も続いた。サトリは、娘に言われるがままにムカデやらナメクジやらヒルなんぞを百匹ずつ捕まえて持っていた

女1

………

男

変な娘だろう

女1

………

男

そうでもないか？

男は、グラスの酒をゆっくりと飲み干す。

男

明日香には分かるかもしれんな、娘の気持ちが

激しい風雨の音。

男

…… 学校なんざ、行きたくなければ、行かなくなってい

グラスに新たに酒をつぐ。

女1　・・・・・・・・

男　行かなくなつていいさ。行きたくなるまで行かないやいい・・・

女1　・・・おじいちゃんに何が分かるの

驚いたように女を見つめる男。しかし、ゆっくりと落ちついた声で・・・

男　・・・分らん。・・・何も分からんよ

酒を飲む。

男　お腹が痛くなるんだろう、朝になると

女1　・・・・・・・・

男　なら仕方がない

女1　本当？

男　だって、どうしようもないだろう

女1　お腹の横が痛くなるの

男　ほう

女1　やけた棒で刺されたみたいに熱くて痛い

男　焼けた棒？お母さんには言ったのかい

女1　うん。でも聞いてくれなかったの

男　そうか

女1　そのうち左の肩も痛くなる

男　・・・ひだりの肩！

間
男はあることに気がつくがそれを隠して話題を変える。

男　明日香、おじいちゃんの名前知ってるだろう

女1　・・・悟

男　そう、サトリと同じ悟だ
だから、本当はみんなお見通しなんだぞ、ハハハハハ・・・

女1　私も人の心が読める

男　・・・・・・・・

女1　・・・・・・・・

男　・・・・・・・・ほんとか？

女1 たぶん

男 いつから

女1 ずっと家にいて、人にあつたことないから分らないんだけど
おじいちゃんの心が分かる時がある

男 ・・・・ウソ？

女1 ううん、ホント

男 それは・・・まずいな

男は慌てて酒をあおり、足りなくて継ぎ足すがこぼしてしまう。

女1 おじいちゃん、「あすか」って誰？

男 ・・・・明日香？明日香は明日香だろ

女1 違うと思う。おじいちゃんは心の中で、いつもあすかつていう人のことを考えている

男、汗をかきだす。頻りに手拭いを汗を拭いながら・・・

男 まずいな

サトリに出会った旅人の気持ちが分かるな。本当に焦るぞ、これは

女1 誰？あすかつて

間

男は諦めたように静かになる。

男 あすかは、わしが、昔、愛した女の人だ。愛するって分かるか

女頷く。

女1 どこまでも真っ白な広い場所に雪が降っている。そこにおじいちゃんとあすかさんかいる

男、本当なんだとすっかり覚悟をきめて・・・

男 明日香、どうやらおまえは本当にサトリになっちまったらしいな

女1 あすかさんは、ここに置いていってって言ってる。おじいちゃんはそんなことできないって言ってる。

男 ・・・・

女1 おじいちゃんはいつもいつもそのことばかり考えて、そして胸が張り裂けそうに悲しい気持ちになっている

男 ・・・・そうだ。その通りだ明日香。わたしには取り返しのつかない過去がある。その出来事のために、人生の殆どが不幸になってしまったような気がする
・・・・でもな、明日香。そういうふうに見える日もあるが、そうじゃなくとても嬉しくて楽しい日もあるんだ。例えば今日だ。今日は台風だ。そして、普段、

口をきいてくれない明日香とこんなたくさんお喋りをしている。こういう日だ
つてある。だから・・・まんざらでもないってことだ

女1
・・・

男、酒をつぐ。

女1
おじいちゃん、飲み過ぎじゃないの

男
ああつ、そうか。ハハハハハハそうだな。今日は随分と飲んでしまった

でも、飲むのは止めない。

男
明日香。明日香は明るくて、優しくて、とってもいい子だ。おじいちゃん、そ
のことをよく知っている

女1
おじいちゃんに何が分かるの

男
分からん。分からないが、でもわたしは、明日香が大好きだ。また昔のように元
氣に走り回って、笑ってほしいと何時も思っている

女1
明日香は、明るい子なんかじゃないよ。いじいじしていて、無口で暗い子だよ

男
・・・

女1
友達なんて一人もないし・・・

男
そんなことはない。そんなことはないんだ。明日香。人間独りぼっちで生きて
るってことはない。生きてるかぎりには、誰かに支えられて生きてるんだ。だか
ら明日香だつて一人じゃない。明日香だつて誰かを支えてるんだ。例えばわし
じゃ

女1
おじいちゃん

男
そうだよ。わたしは、明日香がいらない生活なんて想像もできないぞ。わたしは明日
香がいるからこうして毎日生きていけるんだ

女1
うそ

男
うそじゃないさ。

女1
私を励まそうと思って無理して言ってる

男
そんなことはない。そんな無理などできないんだ。明日香。おじいちゃんの心
はそんな無理ができるほど健康じゃない

女1
本当

男
本当さ、明日香がこうしていてくれるからわたしは生きてる。明日香がいなかつ
たら・・・もう、とつくの昔にこの世におさらばしていたかもしれない

女1
あすかさんが死んだときに？

男
・・・そうかもな

女1
あすかさんって、どんな人？

男 そうだな、明るくてハキハキした、素敵なお女の子だった
蝋燭が消える。

4

風の音。銃声が数発響く。
大けがをした男女がよろけながら歩いてくる。
男は左足を、女は右脇腹を打たれている。男は致命傷には至ってないが、女はこのままではかなり危ない。
男、女に肩を貸している。しかし、よろけて二人倒れ込む。雪の上には血痕。

女2 ありがとう。悟。もういい・・・私、ここで眠るわ

男 何言ってるんだ、いくぞ。こんなところで死んでたまるか

女2 きれいな。全てが真っ白。わたしね。雪がこんなに降ってるの見るの初めて。
自然って本当にすごいね。人間なんてちっぽけなものだわ

男 呑気なこといつてる時か。早く、俺につかまれ

女2 悟。私、やっぱり自分の信念を捨て去ることはできない

男 君達の信念ってなんなんだ。こんな雪山で飯も食わずに戦闘訓練をすることが信念なのか。自分達の理想が実現しないからって、仲間を糾弾して撃ち殺すことが君たちの信念なのか

女、男の話は聞いていないかのように

女2 悟。昔、サトリっていう妖怪の話してくれたでしょ。あの話に出てくる娘がいるじゃない。私ね、すごくよく分かる気がするの

男 あすか、いい加減にしろ。なんだいこんな時に。それより、俺の背中におぶされ。下りよう。急がないと・・・

女は男の背中を離れ、フラフラと歩む。

女2 女がね、気味の悪いものばかりサトリに取って来いって命じるでしょ
その気持ちがあね、私にはよく分かる

・・・きれいだな。雪って本当に真っ白なんだ
私ね、初めて東京に出て来た年の冬、雪を生まれて初めて見たの。ふふふ、笑
っちゃうわ、私ね、ゴミが降ってきたと思ったのよ
ハハハハハハ・・・
ゴミと雪を間違うなんて。小さな島に生まれて、何も知らなかった。電車だつて初めて見たのよ。びっくりしたわ
・・・でも、今思うと、私はあの島に生まれて、そして死んでいくべきだったのかもしれないな

かなり近くで銃声が聞こえる。男は伏せるが、女は立ったまま。

男 あすか。伏せるんだ。見つかる

女2 でも・・・東京に来なければ、悟にも会うことがなかったね・・・

私ね、あなたがサトリのように思えて怖かった。私の薄っぺらな心の中を全部読まれるんじゃないかって私はつまらない女だなんて思う。あなたが私の心の中を覗いてしまったらきつとがっかりするだろうな、っていつも思っていた
難しい論理を口にして、高校生や入ったばかりの大学生なんかをオルグしてる時もね、そうだ、これが私なんだって思いながら、でもこれが本当の私なんだろうかって思っていた

男 あすか、話はもういい。伏せる

男、女を抱き抱えようとする。

女2

お願い、私の話を聞いて
私があなたに最後まで抱かれなかったのは、私が潔癖だからでも、セックスを否定しているからでもないの
いつもあなたに抱かれることばかり考えていたわ
主義のために女を捨てた訳でもない
ただ、私には拭いきれない過去があるの。私はあなたに相応しい女じゃない

男 何、馬鹿なこといつてるんだ。そんなわけないだろう

女2

いいえ、そうなのよ。私が、こんな生き方をしたのも、みんな私が生まれた島のせいなの。貧しいってことは、本当に悲劇だわ。貧しさが全てのものを貧しくしてしまうの
だから、私の生き方は当然だと思う。生きることが楽しいと思ったことは今までなかった
でもね、悟。あなたに会えて、私、変わったと思う。生きるとはこんなにも楽しい、切ない・・・そう思うようになった

男 ずっと一緒にいよう。だから、もう話すのは止めてくれ。山を下りるんだ

再び銃声。あすかの左肩に弾丸。女、激しくのけぞり、その後静かに前のめりに倒れる。男が支える。あすかは瀕死。しかし、話し続ける。

女2

まだ、話は終わっていないわ。(はげしくせき込む)
幸せを知ったら、私、信念にも愛にも生きられないってことに気づいたの

男

.....

女2

私、もうこれ以上、分裂して生きることができない。あなたが好きよ。悟。
でも私は、やっぱり自分の信念に殉じたい

男

なぜだ！ なぜいつもそうなんだ

女2

.....サトリは娘に惚れていた。だから、娘の心を読むことができなかった。でも、いつかサトリの恋が終わってしまったら。娘は自分の心が全てサトリに読まれてしまうことを恐れたと思うの。.....でもね、悟。私、今気づいたのよ。娘は、ずっとサトリに自分の心を分かって欲しかったんだって。(せき込む)
愛されながら心も読んではしかったんだわ。(静かに泣き始める)でもそれが出来ないから、醜いものばかり何度も持つて来させて、サトリの恋心を冷まそうとしたんだと思う

男

.....

男も泣いている。涙でお互いの顔が霞んで見えるほどに。

女2 悟。ありがとう。私あなたに会えたことに感謝するわ。(せき込む)
もし私を愛してくれるなら、私をここに置いていつて。この真っ白い雪の中に私を置いていつて

男 ……そんなこと……出来るわけ……

女2 サトリに心を読まれてしまったとき、娘がどんなことを思ったか、今の私には分かる。(軽くせき込む)。分かるのよ、悟。分かったの。今……
間 ……お願い、私をこのままここに置いていつて

男 どうして君はそうなんだ。一体、何にこだわって、そんなふうになってしまうんだ

女、微かに微笑みながら

女2 ……悟。貧しいということは、本当に不幸なことなのよ

風の音。

5

照明が変わる。

女3 どうぞ、おかけください。足をどうかなさったのですか？

男 ……これは、子どもの頃ケガをしまして

女3 ほう……失礼ですがあまり嘘がお上手ではないようですね

男 ……

女3 高梨……

男 ……悟です

女3 ええ……、高梨さん。これは取り調べではありません。あくまで任意の事情聴取です

男 わかりました

女3 ご協力に感謝します。私、(警察手帳をみせ)警視庁の知念と云います

男 ……女性の刑事の方を初めて見ました

女3 日本にだって女性警官はいます。……少しですが。今回の件は特殊事情もあつて私が配置されています……
では、さっそく

女刑事、写真を男にみせ

女3 ご存じですか？

男 はい

女3 宮里明日香。71年の県庁爆破事件の重要参考人として私たちが追っている人物

です

男
・・・

女3 どういうご関係ですか？

男
・・・友人です

女3 友人？

男
はい

女3 恋人とかではなく？

男 ええ、恋人ではありません。・・・もしかしたら友人でさえもないかもしれない

女3 高梨悟さん・・・少し調べさせていただきました。北海道のご出身ですね。
紋別郡遠軽町・・・

男
ええ

女3 どんなどころなんですか

男
・・・

女3 ・・・彼女とはどこで知り合ったんですか

男 アルバイト先で知り合いました。

女3 池袋の大衆酒場『魚源』で間違いありませんか

男
・・・そうです

女3 高梨さん、彼女がどんな活動をしているかご存じではなかった

男
後から知りました

女3 知ってどうしましたか？

男
・・・どういう意味ですか

女3 彼女が活動家と知って付き合いをどうされましたか、という意味です

男
・・・そのままです

女3 あなたは特別な思想・信条をお持ちではなかった。ノンポリですね。デモなどにも参加してない

男 デモには時々行きました。確かに私はノンポリですが、別に彼女たちに反感を感じていたわけではありません

間

女3 あなた、72年2月10日前後、どこにいましたか

男
・・・

間

女3 実は・・・宮里明日香の遺体が発見されました。長野県の森林地帯です。死後2年ほど経過しており、ほぼ白骨化していました。死因は失血死です

男

女3 遺体は一部野生動物などによって損壊されていましたが、比較的きれいなかたちで残っていました。現場の様子を御覧になりますか？

男、顔を上げ女刑事をみる

女3 その前に、どうして今日、高梨さんに事情をお伺いしているかお知らせしよう。彼女が身に着けていた防寒着の胸ポケットにビニール袋に入ったメモが残されていたんです。死の間際に書いたものでしょう。筆跡も乱れて読みにくくはありますが、しかし判読はできます。ビニール袋は用意していたものでしょうね。確実にある人物に届くようにと

男

女3 あなた宛てのメモです

女刑事、ビニール袋に入ったメモを男に手渡す。
男。メモを読み、泣き崩れる

間

女3 高梨さん、宮里明日香を愛していましたか

男 愛していました、なのに私は彼女をあそこに置き去りにして逃げたんです・・

間

女3 あなたに現場の写真をお見せるのはよしておきましょう・・
あそこは、真冬には3メートル近い雪が降り、何もかもが真っ白に埋もれてしま
うんだそうですね・・・

間

女3 風葬というのをご存じですか。火葬も土葬もせずに葬る方法です。日本では沖縄
地方で長く行われていました。風の送りです
私の個人的な話をします。実は私の父も沖縄本島の出身でしてね。だからという
わけではないが宮里には同情する面がないわけではない。彼女はある事件に巻き
込まれていましたね。その調査で私は彼女を追っていたという部分もある

男 私が殺したんです

間

女3 あなたがあの日どこにいて何をしていたのか私は問いません。自分を必要以上に
責めてはいけません。宮里はあなたを心から愛していた。それは少々いびつな愛
だったかもしれないが・・でもだからそこ純粹だった。私はそう思います

男

女3 私が言うことではないのですが、高梨さん、あなたはもう新しい道を歩き始めるべきだと思いますよ。
・・・今日はご協力いただきありがとうございます。お氣をつけてお帰りください

6

照明が変わる。

女1 おじいちゃん

男 ・・・

女1 おじいちゃん！

男、驚いたように

男 あ、ああ

女1 おじいちゃん、明日香さんと別れて、それからどうしたの？

間

男 それからか・・・それから、わしは山を降り、二年後におばあちゃんと結婚した。そして明日香のお父さんが生まれたんだ

女1 おばあちゃん？

男 明日香が生まれる前に病気で死んでしまった

女1 どんな人だったの？

男 そうだな、優しくて、温かい人だった

7

照明が変わる。

男 あの、久恵さん

女3 はい

男 すいません。お見合いを承諾していいおいてこんなことを言うのははなはだ失礼なのですが

女3 はい？

男 私は人を愛せるような人間ではないのです

女3 え？

男 ですから、この話はなかったことにしていただきたい

女3 ……はい

男 それでは私はこれで

女3 待ってください

男 !

女3 私の話も聞いて頂けますか。断つてもかまいませんから

男 いや、しかし

女3 お願いします

間

男 わかりました

女3 私の趣味は音楽鑑賞です。特にフォークソングが好きです

男 はあ

女3 最近はおぐや姫や風をよく聞きます

男 ……

女3 私の苦手なものは運動です。スポーツというものをやったことはありません。中学校の時ににか運動部に入りたかったのですが、家の事情で入れませんでした。中
男 そうなんですか

女3 はたちもう二十歳を過ぎてるのに時々マンガを読みます。中学校卒業したらマンガやめようと思ったんですができませんでした。好きなのは陸奥A子さんとか太刀掛秀子さんとか、リボン系で子どもっぽいですがそういう人です
あと、テレビマンガも時々見ます。『母をたずねて三千里』とか

男 ……

女3 以上です

男 ……

女3 タベ寝ないで考えたんです。何度も考え直して、結局これです。小学生の自己紹介みたいになっちゃいました。でも、あんなに考えて、練習したんだから、たとえ断られるってわかっていても、言ってあげないとかわいそうでも、すっきりしました。断られることはわかっていました。だからそんなに恐縮してもらわなくて結構です

間

男 ……すてきな自己紹介でした

間

女3 そんなことありません
……私は短大も出ていない教養のない女ですが

男 いえ、そんなことは・

女3 でも、無学でもわかることはあります

男 はあ

女3 高梨さん

男 はい

女3 あなたはまるで、たった一人で雪原に立ち尽くしているような人です

男 え？

女3 そんな人を見て人はどうするのでしょうか
他のひとのことはわかりません。でも、私なら・・・いえ、私はきつとほっておけないと思います。仮にその人が私のことを好きになってくれないかもしれないとしても、今にも凍えそうな人を、私は、私は、ほっておけません

男 久恵さん・・・

8

照明が変わる。

女1 おじいちゃん

男 ……

女1 おじいちゃん！

男、驚いたように

男 あ、ああ

女1 私のお父さんはどんな人だったの？

男 ……なにも覚えていないのかい

女1 うん・・・少しか
抱っこしてくれた時、日向で、川が光ってた

男 ……

女1 お父さん、どんな人だった

男 ……どんな人だったんだろうな。今度お母さんに聞いてみたらどうだ

女1 ……お母さん、嫌い

男 そんなこと言っているのかな

女1 だって・

男 明日香はお母さんが大好きだ。だから、そんなことを言ってるんだよ
女1 違う！

男 ・・・・違わないさ
今は今日子が病気だから、お母さんはずっと今日子の側にいなきゃならない
でも今日子が治ったら、また昔みたいに親子三人で暮らせるさ

女1 今日子は治るの？

男 ・・・・治るとも。明日香だって妹がいなくなったら悲しいだろう？

女1 うん

男 明日香は今日子のことをうらやましいと思ってるのか

女1 ・・・・少し

男 お母さんを独り占めしてると思ってるのか

女1 ・・・・

男 今日子は今、一生懸命病気と戦っている。応援してあげるんだ

女1 ・・・・

男 その立場になってみないと分からないことは沢山ある
人間は人の心を知ることとはできないからな

女1 ・・・・

男 明日香が、今日子だったらうれしいかい。毎日お母さんが側にいてくれて
だけど、一日中ベッドで、点滴をして、飲むと頭の痛くなる薬を飲まなきゃい
けないんだ。学校にもいけない。友達と元気に遊ぶこともできない。そうやつ
て一人で病気と戦っているんだ

女1 ・・・・

男 お母さんがついてあげてなきや、今日子は本当に独りぼっちなんだよ

女1 ・・・・明日香、我慢する

男 ・・・・いい子だな。さすがはわしの孫じや

女1 ・・・・

男 いいかい、明日香。一番甘えたい盛りにお母さんに会えて、明日香もかわい
そうだと思う。でもな、今一番辛いのは誰だと思う

女1 ・・・・

男 お母さんだろう。勤めから直ぐ病院へ行って、家には寝に帰るだけだ。お父さ
んもいなくて、一人ぼっちで頑張ってる
だから、明日香も今日子だけじゃなく、お母さんも応援してやってくれ

女1 どうすればいいの

男 ……さあ、それは、明日香が考えてごらん

9

照明が変わる。

男 桜子さん

女3 お父さん

男 あなたはまだ若い。うちは見ての通り久恵もなくなって、残っているのは足の不自由な私だけだ。このままでは日々の生活だつてままならない。
あなたは資格だつてあるんだし、きつと再婚相手だつてすぐに見つかるだろう。過去に縛られることはない。息子のことは忘れて新しい生活を考えた方がいい。明日香と今日子には父親が必要だ

女3 お父さん。私をこの家においてください。お母様には本当の子どものように良くしていただきました。それに私は真悟さん以外の人を愛することはできません

男 もちろん、今すぐにどうこうというわけじゃないよ。あなたの息子を思つてくれる気持ちは本当にありがたい。ただ、人間は思い出だけでは生きていけないってことなんだ。生きていくためには金も必要だし、支えてくれる人間が必要だ。私は桜子さんや明日香たちを支えるにはあまりにも非力だ。いや、むしろ足手まといだ
私一人ならどんなんでも暮らしていける。あなたは、一日も早く新しい道を見つけた方がいい

女3 お父さん

男 ?

女3 真悟さんが言つたことを思い出します。親父は母にも自分にも優しく誠実だつたが、いつもどこか一人で何かを見つめて佇んでいるような〈遠さ〉があつた

男 真悟……

女3 だからいつか言つたんだ。父さん、人間は思い出だけでは生きて行けない、前を見ろよ、俺と母さんを見ろよつて

男 ……

女3 そしたら、親父のやつ、当たり前だ、だからこんな生き方、お前はしちやいけな
いんだ、つて言つたんだつて

男 そんなことを……

女3 お父さん、私は思い出に生きようとしてゐるわけではありません。真悟さんが育ち、お母さんが笑つていたこの家で、子どもを育てていきたいんです。お母さんがこういつてました。たった一人で雪の原に立ち尽くす人に、やめろとは言えない。でもその人が凍えないようになにか温かい物を作つて帰ってくるのを待つていたい、そんな結婚生活だつたつて……

10

大きな風の音がする。

明日香が怖がり、男の背にしがみつく音は止み、明日香は体をゆっくりと離す

女1 おじいちゃん

男 ?

女1 庄屋の娘はどうして蜘蛛や蛇なんてサトリに持って来させたんだろう

男 どうしてかな

女1 あすかさんは、分かる気がするって言ったんでしょう

男 ……そう言った

女1 ……娘はその後どうなったの？

男 知りたいか

女1 ……悲しい話なら聞きたくない

男 悲しいかどうかは、明日香が決めればいい

風が激しく吹き荒れる音。

11

照明が変わる。

男 サトリは娘への気持ちが少しずつ冷めていくのを感じていた

女2 サトリ。いるんでしょう

男 ここにいる

女2 サトリ、お前まだ私のことを好いてるか

男 ……

女2 ほほほほ、もう冷めてしまったのかい、案外いい加減なんだね

男 そんなことはない

女2 そうかい、それじゃ、まだ私の頼みを聞いてくれるかしら

男 頼みとはなんじゃ

女2 今度は人間の生首を百本あげてきておくれよ。それもみんな女のをね。なるべく若い方がいい。

男 首だと

女2 なんだい。その怖い顔は。それとも怖じ気づいたのかい

男 そんなに沢山の女の首をどうするつもりだ

女2 どうしようと私の勝手さ。お前はそれを取って来てくれるのか、それとも来ないのか

男 断る

女2 ホホホホホ、やっぱりただの腰抜けだったんだね

男 なんとでも言え、しかし、もうお前の言うことは聞かぬ

女2 私に惚れてたんじゃないのかい

男 惚れていた。お前の美しさに
お前は美しい。しかし、お前の心は醜い

女2 心も読めない癖にどうして私の心が醜いと言い切れるのさ

男 心は読めない。しかし・・・

女2 ・・・・

男 心は・・・

女2 ホホホホホホ、どうしたい、妖怪

男 これは

女2 愛想が尽きたら、私の心が読めたのかい

サトリは頭を抱えて苦しがる

女2 サトリ、お前も一端の妖怪なら、取り乱すんじゃない
今まで何百人の心を覗いてきたんだろ

サトリが苦しむ。女、サトリに近づき、その頭を抱える

女2 妖怪、人の心なんぞ覗いてなにかいいことがあったのかい

男 ウウウウウ・・・

女2 サトリ、お前、私をほんの束の間でも好いていたのなら私の最後の望みをかなえておくれ

男 最後の望みとは

女2 殺しておくれ

男 殺す？

女2 そうだ、殺しておくれ。お前も妖怪。女一人ぐらい殺すは訳ないだろう

男 お前を殺す

女2 ・・・・私をこの地獄から救っておくれ

男 この俺がお前を殺す

女2 私のことを少しでも好いてくれたのなら、後生だから殺しておくれ

男 ウワーーーーーッ

弾けるように女から離れる

女2 サトリ。お願いだよ。私の心を読んだなら、どうか慈悲と思つて手にかけておくれ。訳あつて自分で縊れて死ぬることのできない身。ならば、惚れたお前の手にかかり、地獄とやらに落としておくれ
サトリ！

男 ・・・・

女2 悟・・・きつとあなたは酔えない人なのよ・・・ままごと遊びでね。泥でつくったご飯とか、食べられないでしょ。だつてこれドロだらつて。(軽くせき込む)。私の生きてる世界は、きつととても変わったルールで行われている変わったゲームなんだわ。私は、泥で作ったお団子でも、おしいつて真面目に真剣に食べられる。でも、あなたは、それがままごとだつて分かつていても食べられない人なのよ

男 あすか

女2 雪国に生まれたかったな。そうすれば、小さいときからこんな清純な世界をみることができたんだもの

男 ・・・・

女2 お願い。私のわがママをきいて。いままでわがママらしいこと、言つたことなかつたでしょ
私をこのまま、ここに置いていつて

男 あすか

女2 私の中の醜いものを全て、この真つ白い雪で浄化させたいの

男 ・・・・

女2 ・・静かだわ。地球上にこんなに静かで満ち足りた空間があつたなんて、今まで知らなかつた

男 あすか！

女2 サトリ！妖怪よりもおぞましい我が心を覗いて、百年の恋も冷めたであろう。しかし我が内なるを知るは、お前だけぞ・・・お前が心を読む者と知つて私は救われた気がしたのだ。このままこの醜い心を抱いて座敷牢のごとき屋敷につながれ死ぬくらいなら、誰かに心の内をすっかり明かして死にたかつたのだ。サトリ。我が心を食らえ。そして、我が身体をも食らえ。生きることの地獄を、お前には知つてほしいのだ。そして、こんな思いをして生きた女がいたことを永遠にお前の胸の内に刻んでおくれ

はげしい暴風、何かを吹き飛ばそうと荒れ狂う嵐。

12

照明が変わる。

女1 おじいちゃん

男 こわくない。こわくないぞ明日香

女1 ・・・・

男 もうすぐ今日子も帰ってくるだろう。この間の手術の経過がいいんだそうだ。何年も様子を見なくてはならないだろうが、少しずつ不安も消えるだろう。明日香は、今日子のお姉さんなんだから、よく面倒見てあげるんだぞ

女1 おじいちゃん

男 ん・

女1 おじいちゃんもいるよね

男、心の中を覗かれでもしたようにしばし止まる。しかし、次の瞬間、笑顔になってまた話し始める。

男 もちろんだ。おじいちゃんも今日子が帰ってきて、みんなで楽しく暮らすのを楽しみにしてる

女1 おじいちゃん、長生きしてね

男 ハハハハハハ、そうだな

女1 おじいちゃん

男 どうした

女1 おじいちゃんは寂しいの

男 寂しいことなんかあるか。こうして可愛い孫と一緒にいられるんだから

女1 かなしいことが沢山あったね

男 ・・・・

女1 おじいちゃんの心の中、悲しみで一杯だよ

男 明日香・・・・

女1 悲しい心の人が沢山いるよね

間

男、涙を一粒落とす。

男 ・・・・明日香

わしは悲しくも寂しくもない。大丈夫だ。だから明日香も元気を出せ

女1　・・うん。

男　わしは明日香のことが大好きなんじゃ。明日香に支えられてこうして生きている。明日香がわしに元気をくれて、わしが明日香に元気をあげるんだ

女1　うん　・・・おじいちゃん

男　ん？

女1　あすかさんって・・

停電が終わる

男　おっ

女1　電気がついた

男　本当だ。

女1　台風いつちやうね

男　ちよつと寂しいな

女1　そうだよね

男　でも、明日はきつといい天気だぞ

女1　あした川原にいきたい

男　そうだな。行ってみるか

女1　約束

男　よし、約束だ

そうと決まったら、もう寝よう。明日は早起きして、弁当作って川原に行くぞ

女1　おーっ

男　ハハハハハハ・・そうじゃ、明日香、弁当のおかずは何かいい？から揚げか？おにぎりとサンドイッチどっちにしようか、なあ、明日香・・・

了